

虐殺以後の村落社会における権力関係の形成と変化

——インドネシア 9・30 事件の事例研究

林英一（大阪経済法科大学
アジア太平洋研究センター）

キーワード：インドネシア、9・30 事件、虐殺、村落社会

はじめに

過去が清算されず、赦すことも赦されることもない閉じられた空間に置かれた人々は、一体どのような関係性を構築するのであろうか。

本論の目的は、1965年に吹き荒れた政治的暴力の過程で住民虐殺が発生した村落社会のなかで、虐殺以後に加害者家族と被害者家族に分かれた人々が生きてきた歴史を明らかにすることで、上記の問いに答えることにある。

具体的には、筆者が2004年以来、計3年におよぶ現地滞在の多くの時間を過ごした、インドネシア共和国東ジャワ州バトゥ市バトゥ郡ブンガ村（仮名）をケース・スタディとして取り上げる。

ブンガ村が中央で起きた政治的激変に巻き込まれたのは1965年のことである。首都ジャカルタで9・30事件が発生し、大統領親衛隊によって陸軍の7将軍が襲われ、うち6人が拉致・殺害されたことに端を発し、その後全国各地で「共産主義者」に対する大量殺戮が繰り返された。その犠牲者数は50万人とも、100万人にのぼるともいわれる。

このように9・30事件には、7将軍の拉致・殺害事件と、共産党解体にともなう大量殺戮の二つの意味があり、それらは戦後アジアに、脱植

民地化から開発へ、政治から経済へというパラダイム・シフトを迫った歴史的出来事であった。具体的には、つぎのような国際関係、国内政治、国内社会上の転換が起きた。すなわち、冷戦下、東南アジアに巨大な反共親欧米国家が誕生し、アジアの冷戦地図が塗り替えられた。スカルノ体制からスハルト体制へと移行した。インドネシア共産党（略称PKI、以下PKI）が一方的に壊滅させられ、その過程で、地方で大量殺戮が発生した。この大量殺戮についてインドネシア駐在米大使のグリーンは、のちに「アジアにおいて日本軍の真珠湾攻撃以来の衝撃的な出来事」と述懐し、CIAも「20世紀最悪の大量虐殺のひとつ」と評している。

1. 先行研究の検討

中央で発生したクーデターをめぐることは、インドネシアの国内外ですでに200以上におよぶ関連書籍や論文、一次資料が存在し、膨大な研究が蓄積されている。

ヌグロホ・ノトスサントとイスマイル・サレーは、1967年の時点で共産党の陰謀説を提起した⁽¹⁾。これに対して、1971年にベネディクト・アンダーソンとルース・マックヴェイが、フレデリック・バンネルと共同で当時のインドネシア各地の新聞を検討した「コーネル・ペーパー」をもとにして、事件を陸軍内部の紛争と結論づけた⁽²⁾。

しかし、インドネシア政府の「公式見解」は

(1) Notosusanto, Nugroho and Ismail Saleh, *The Coup Attempt of the "September 30 Movement" in Indonesia*. Jakarta: Penmas, 1967.

(2) Anderson, Benedict and Ruth McVey, Frederick Bunnell, *A Preliminary Analysis of the October 1, 1965, Coup in Indonesia*. Modern Indonesia Project Southeast Asia Program, Ithaca, New York: Cornell University, 1971.

現在にいたるまで、事件は陸軍内部の紛争によるものではなく、共産党のクーデターであるとの説明に依拠しており、「コーネル・ペーパー」を分析した研究成果は禁書となり、アンダーソンは1972年以降10年近くにわたり、インドネシアへの入国を禁止された。その後も中間的な見方や、スハルト関与説、CIA西側関与説など、さまざまな見解が出されたが、依然として多くの謎が残されている⁽³⁾。

これに対して、中央で発生した事件が、なぜ地方での大量虐殺へと発展したのかという視点からの研究がはじまるのは、1990年代に入ってからであり、ロバート・クリップの編著がその先駆として位置づけられる。6つの論文、2つの軍の報告書、3つの目撃証言を掲載し、情報、思想、解釈という観点からジャワとバリにおける虐殺の実態を捉えた同書は、各地域における様々な地域的な要因が、虐殺の広がりや規模を決定していたことを明らかにした⁽⁴⁾。

またインドネシア人研究者のヘルマワン・スリスティヨは、東ジャワのクディリやジョンバン周辺で、加害者側への詳細なオーラル・ヒストリーを行った。それによれば、同地域は以前から砂糖工場とプサントレン（イスラム寄宿塾）を背景に、肥沃な平野をめぐる土地問題による対立が存在しており、それがインドネシア農民戦線（略称BTI、以下BTI）の「一方的行動（akusi sepihak）」⁽⁵⁾によって激化し、東部ジャワで最も激しい虐殺が繰り広げられたという⁽⁶⁾。

さらに2000年代に入ると、インドネシアの民

間団体によるオーラル・ヒストリーや虐殺を正面から扱った日本人研究者による論考も登場するようになった。

たとえば、インドネシア社会史協会（略称ISSI）のジョン・ローサ、アユ・ラティらはインドネシアのボランティア・グループとともに、2000年以降、260人におよぶ関係者に聞き取りを行い、被害者家族の声を掘り起こすことに成功している。それによれば、10月17日にジャカルタを出た一大隊規模の陸軍空挺連隊の到来が殺戮の導火線となり、大衆組織の青年や民兵も逮捕、掠奪、レイプ、殺害に手を染めていた。一連の逮捕劇のなかには、ある人が「そいつはPKIだ」と人差し指を向けるや、大衆がその人を捕まえ、自己弁護をする余地もないままに殺害したり、家族を人質にしたりすることで逮捕の標的を呼び出す方法がとられるなど、理不尽なものがあつたことが語られている⁽⁷⁾。

一方日本では、2002年以降、倉沢愛子による先駆的な研究成果が発表されている。倉沢は中部ジャワのクラテン、東部ジャワのクディリ、バリ島のジェンプラナ県を事例に、虐殺の経緯や要因を村落社会に内在している社会文化的問題に着目することで明らかにすると同時に、虐殺の規模や実態については地域的な差異はあるものの、その背後には一貫した国家権力の意図が存在していたと指摘する。すなわち、虐殺はそれ以前から社会に内在していた様々な対立を伏線としつつ、国家権力がPKIの作成した「被害者名簿」の存在や、共産主義者は「残虐で不道徳」とのイメージを巧みにプロパガンダとし

(3) ジョン・D・レグ著、中村光男訳『インドネシア歴史と現在』サイマル出版会、1984年。Crouch, Harold, Another Look at the Indonesian "Coup". *Indonesia*. Jakarta., 1973. Scott, Peter Dale, The United States and the Overthrow of Sukarno, 1965-1967. *Pacific Affairs*. 58(2), 1985. 倉沢愛子「インドネシアの9・30事件と住民虐殺」『三田学会雑誌』第94巻第4号、2002年1月、86, 87頁。Roosa, John, *Pretext for Mass Murder: the September 30th Movement and Suharto's Coup D'état in Indonesia*. Madison, Wisconsin, University of Wisconsin Press, 2006.

(4) Cribb, Robert, ed., *The Indonesian Killings of 1965-1966: Studies from Java and Bali*. Monash Papers on Southeast Asia No. 21, Clayton, Victoria, Australia: Center for Southeast Asian Studies, Monash University, 1990.

(5) 1963年にPKIが農地改革に積極的に取り組む方針に転換したことを受けて、各地で農民が実力行使によって地主から農地を奪った行動のこと。暴行、放火、誘拐、脅迫、殺傷などを巻き起こし、ときに治安当局との衝突騒ぎに発展した。

(6) Hermawan Sulisty, *Palu Arit di Ladang Tebu: Sejarah Pembantaian Massal yang Terlupakan 1965-1966*. Jakarta: Kepustakaan Populer Gramedia, 2000.

(7) ジョン・ローサ、アユ・ラティ、ヒルマル・ファリド編、藤目ゆき監修、亀山恵理子訳『アジア現代女性史5 インドネシア9・30事件と民衆の記憶』明石書店、2009年。

て流し、情報操作することで、「普通」の隣人同士が殺し合うほどにエスカレートしたというのである⁽⁸⁾。2011年には早稲田大学アジア太平洋研究センター原口記念アジア研究基金により、「1965年9月30日事件の総合的研究」研究会（研究代表：後藤乾一）が発足している。

以上、簡単ではあるが9・30事件をめぐる先行研究をみてきた。中央で起きたクーデター未遂事件については、事件直後から膨大な研究が蓄積されてきた反面、地方における大量虐殺を焦点とした研究が提起されるのは1990年代以降のことであり、それも2000年代以降に入って綿密なオーラル・ヒストリーや長期のフィールドワークにもとづく成果が、インドネシアや日本でも発表されるようになってきた。しかし、虐殺がその後の地域社会の権力関係を形成するにあたっていかなる影響を与えたのかという視点からの研究は、筆者の試論⁽⁹⁾を除き、管見の範囲では未だほとんどなされていない。そこで本論では、筆者が参与観察を続けているブンガ村を事例に、虐殺以後の村落社会における権力関係の形成の一側面を考察してみたい。

ブンガ村は2010年の統計で人口7611人の山村で、12の字常会と50の隣組から構成される。筆者はまず村政の中心であり、人口の約半分に相当する3279人が暮らすマウル区（仮名）のなかから、第1字常会（4つの隣組）と第2字常会（2つの隣組）、計112世帯を対象に悉皆調査を実施した。その上で村人への聞き取りを行うとともに、スハルト安定期の村政について赤裸々に綴った貴重な同時期資料である f 村長の手記（1985年～1990年）を入手し、解読した。

なお以下では、つぎのような仮名表記を行う。まず筆者が作成した住宅地図上にある村人は、住居番号、性別、年齢、虐殺の被害者／加害者／傍観者の区分などの情報を組み合わせた表記を、つぎに住居地図上にない村人には、アルファベットを用いた表記を行う⁽¹⁰⁾。たとえば[1・2・3]という表記は、[第1字常会、第2隣組、住居番号3]を、[A（男性、50歳）]は、[50歳、男性のA氏]を、それぞれ意味する。また年齢は、とくに断りが無い限り、筆者が社会調査を行った2010～2011年当時のものである。

2. 虐殺以前の村

拙論⁽¹¹⁾によれば、虐殺以前のブンガ村はオランダ植民地時代のプランテーション農業や開発から取り残された地域であった。もともと開発が遅れていたバトゥでは、清涼な高冷地であることを活かした畜産（牛の加工）・果樹業が主であり、そのなかでもブンガ村は、食糧（稲、トウモロコシ、イモ）を生産するための農民農業が細々と営まれる程度であった。

また東ジャワは現在でも伝統的イスラム団体ナフダトゥル・ウラマ（略称NU、以下NU、イスラム宣教師連盟）が影響力をもつとされる地域であるが、ブンガ村ではジャワ主義者⁽¹²⁾も多く、イスラム色は現在にいたるまで際立って強いということはない。

しかしそのような共同体のなかでも、ナサコム⁽¹³⁾期（1959～1965年）には、村政をめぐり、インドネシア国民党（略称PNI、以下PNI）、ナフダトゥル・ウラマ党（略称PNU）の支持者

(8) 倉沢、前掲論文、81-100頁。倉沢愛子「9・30事件（1965年）とインドネシア共産党撲滅」松村高夫・矢野久編『大量虐殺の社会史』ミネルヴァ書房、2007年、149-179頁。倉沢愛子「絶えざる対立と動揺の現代史」倉沢愛子・吉原直樹編『変わるバリ、変わらないバリ』勉誠出版、2009年、12-35頁。倉沢愛子「インドネシア9・30事件と社会暴力」和田春樹他編『岩波講座 東アジア近現代通史 ベトナム戦争の時代 1960-1975年』第8巻、岩波書店、2011年、171-193頁。

(9) 林英一「虐殺以後の村落社会の変容」『比較文化研究』第98号、日本比較文化学会、2011年、149-159頁。林英一「インドネシア9・30事件以後の社会変容」早稲田大学アジア研究機構『次世代アジア論集』第6号、2013年、3-34頁。

(10) 住居地図については林、前掲論文「虐殺以後の村落社会の変容」、159頁参照。本論では紙幅の都合により地図を掲載できないが、既出論文との統一性や悉皆調査の対象内であるのか対象外であるのかを示すため、このような仮名表記を行った。

(11) 林、前掲論文「虐殺以後の村落社会の変容」、151-152頁。

(12) クジャウェン、あるいはクバティナンとも呼ばれ、「伝統的なジャワ固有の学」を意味する、独自の靈感や神の啓示から得られた教義の総体のこと。本論では、イスラムなどの一神教よりも土着的な伝統を重んじる者といった程度の意味合いで用いる。

(13) Nas-A-Kom, Nasionalism-Agama-Komunisme を略してつくられた合成語。

からなる保守勢力と、インドネシア共産党の支持者が主導する新興勢力が激しく対立していた。

3.村での事件の経緯

ブンガ村の村人たちはいまでも1965年に起こった虐殺を「ゲスタプ」⁽¹⁴⁾と呼び、村はじまって以来の大事件として、なかばトラウマ化して記憶している。それも無理もなからぬことで、たとえばマワル区の一部の住居地図を作成し、そこに虐殺の被害者と加害者の家族を色分けしてみると、近隣同士で殺し合いが行われていたことが一目瞭然となる。一見、のどかで平凡そのもののような村で、なぜこのような悲劇が生まれたのであろうか。ブンガ村における虐殺の構図を、東ジャワの他地域の事例も参照しながら詳述してみよう。

ブンガ村における住民虐殺は、1965年の10月中旬から11月下旬の約1カ月間に集中していたが、1966年初頭まで続いたとされる。ブンガ村の他にも、同じマラン県下では、ラワン、シンゴサリ、トゥンパンでも虐殺行為があったことが先行研究によって確認されている⁽¹⁵⁾。

虐殺が起こる一つの契機となったのは、現大統領夫人のアニ・ユドヨノとその弟で2011年に陸軍参謀総長に任命されたブラモノ・エディ・ウィボウォ中將の実父にあたるサルウォ・エディ・ウィボオ大佐率いる陸軍空挺連隊（略称 RPKAD、通称レッド・ベレー）の一個分隊の兵士が村にきたことであり、筆者の聞き取りの結果分かっているだけでもブンガ村で10人の被害者が発生している。

虐殺当時の様子については、つぎのような話が聞かれ、住民虐殺の背後に軍、警察といった国家権力の関与があったことが窺い知れる。

「虐殺をしていたのはバンセル⁽¹⁶⁾に助けられた軍隊だ。バンセルは軍隊から協力を頼まれたので、助けていただけ。軍隊はすでにこの村の人間のデータをもっていた。上からの命令があればとにかく連れて行かれた。この村では拉致された9人のうち7人が帰らず、2人が戻ってきた」⁽¹⁷⁾

「虐殺のときはちょうど父が村の外に出ていて不在だった。村役人の黙認のもとで正義に基づかない多くの盗み、逮捕・殺人劇が行われた。当時はいつもラジオで各地域の情報を聞いていたが、どこでも恐ろしいことが起こっていることがわかった。捕えられた人たちはみな軍の支部に送られた。遺体は無残にも同じ穴に放り込まれ、乾燥した葉で覆われるだけで、手足がみえていた。しかし彼らを埋葬する勇気のある者は誰もいなかった」⁽¹⁸⁾

しかしそうした国家権力の関与は、先行研究が指摘するように「統一的な意図」⁽¹⁹⁾があったとまでいえるのだろうか。

そのような疑問を抱きながら、さらに村人たちの話に耳を傾けていくと、住民虐殺が村人同士のあいだで繰り広げられた「魔女狩り」の様相を呈していたことが窺い知れた。

「兄の前のアンソルの指導者はVという人だったが、交通事故死した。兄はその後を受ける形で、アンソルのメンバー全員の協議を経て1965年からアンソルの指導者をつとめた。アングレ区の女性と結婚し、そちらに移転した。その後、ロンボック（バリ島東隣の島）で死去したのは2007年。NUは宗教組織であり政治組織ではない。もともとブンガ村とバトゥではNUが多数派で、NUによってイスラムが広められ

(14) 9月30日運動のインドネシア語である Gerakan September Tiga puluh の略語。国軍がナチスのイメージを喚起するためにこの名称をつけた。

(15) Cribb, Robert ed, op.cit.; pp170, 171.

(16) NUの青年団であるアンソルの奉仕隊のこと。

(17) [1・2・2] (男性、66歳) へのインタビュー、2011年1月22日、自宅。

(18) [1・3・29] (女性、77歳) へのインタビュー、2010年7月21日、自宅。

(19) 倉沢、前掲論文「インドネシア9・30事件と社会暴力」、183頁。

た。1960年代当時には、アンソル（NUの青年団）のほかにもファタヤット（NUの女性組織）、人民青年団（PKIの青年組織）、ゲルワニ（共産党の女性組織）などがあった。その頃、村内で行われていた行事としては礼拝、打楽器（ドラムやタンブリンのようなもの）の演奏、ブンチャック・シラットなどがあった。ブンチャック・シラットの講師はeという人。村の中でパンセルのメンバーは15人ぐらいいた。村で青年やPKI集団に対する逮捕と虐殺が起こったのは1966年。そのとき『もしもPKIの支配下におかれたらイスラム礼拝堂はタユップ⁽²⁰⁾の場になってしまう』あるいは、『PKIは神を信じないので、宗教に熱心な者やNUのメンバーを敵視してコーランを焼いてしまう』といったプロパガンダがあった。しかし一方で土地問題は一度も起こらなかった⁽²¹⁾

「虐殺のときは、軍人ではなく、隣近所の村人が拉致しにきた。狙われたのは村の有力者たち。虐殺が起こる前はイスラムの礼拝などしたこともなかったが、PKIと思われぬように急に礼拝にいそむようになった」⁽²²⁾

「虐殺のときはみな電気を消して、とても恐れていた」⁽²³⁾

「虐殺のときはとても怖く、多くの人が盗み、逮捕、殺人を恐れて夜は電気をすべて消し、外出する者はいなかった。過去にPKIに参加していたことがある人は恐れて街に出て行った」⁽²⁴⁾

「虐殺のときは、PKI支持者の家でよく騒ぎが起きた。だいたい12人ぐらいが突然捕えら

れ、そのまま二度と帰ることはなかった」⁽²⁵⁾

「そのときは多くの恐ろしいことがあった。マグリップ（日没後の礼拝）の後は家から出る人は誰もおらず、みな電気を消していた。多くの誘拐があり、連行された人は現在まで帰ってこない。私たちの親戚のなかにも逮捕される前に軍司令部に助けを求めにいった者がいるが、結局軍司令部に辿り着く前に捕まってしまう、現在まで消息不明だ。虐殺が起こる前はほとんどの家がPKI系の組合に入り、ステッカーを張っていた。父が元軍人の私の家だけではなくて珍しがられたのを覚えている。ちょうどその頃、墓地で遊んでいて花をつもうとしたところ、いくつもの人間の耳が束ねて木にくくられているのをみた。37人が大衆によって埋葬された。たとえ夜間禁止令が出ていなくても、みな怖くて夜は外に出なかった」⁽²⁶⁾

「毎日夕方から夜にかけて9人の人間が連行された。住民はみな恐れ、何もできなかった。もしも夜に連行された者がいると、翌朝、集落はそのことについての話でもちきりとなり、騒然としていた。PKI党员の家には、その印として赤色でハンマーと草鎌があった。当時イスラムに熱心な者はあまりいなかった」⁽²⁷⁾

「虐殺当時、人々は恐れ、そのことについて勇気をもって政府に話す住民はほとんどいなかった。多くの人が捕えられ、刑務所に入れられた。勇気を持って政府に批判的なことを話し敵対すると突然行方不明となり殺された」⁽²⁸⁾

ここで興味深いのは、住民虐殺の被害者と加

(20) 伝統的な行事で、女性が男性の前で踊り、酒を飲み、金銭にもとづく乱交が行われることもある。

(21) X（男性、68歳）のインタビュー、2010年11月27日、自宅。

(22) [1・3・7]（男性、55歳）へのインタビュー、2010年7月22日、自宅。

(23) [2・1・10]（男性、57歳）へのインタビュー、2010年8月8日、自宅。

(24) [1・3・22]（女性、61歳）へのインタビュー、2010年7月21日、自宅。

(25) [1・3・3]（男性、75歳）へのインタビュー、2010年6月30日、自宅。

(26) [1・4・5]（女性、59歳）へのインタビュー、2010年9月24日、自宅。

(27) B（男性、79歳）へのインタビュー、2010年10月2日、友人宅。

(28) [1・1・27]（男性、66歳）へのインタビュー、2010年10月7日、自宅。

害者を見比べてみると、もともとPKI支持者が多いとされていた農業労働者、貧農が加害者となり、むしろ地主や村内の有力者が被害者となっているということである。

たとえば、新興勢力の指導格であった男性は、村人の大多数がアンベラ造りの家で暮らすなか、石造りの家を構える地主であり、村の有力者でもあった。また、[1・1・2]（男性、当時35歳、被害者）は、6ヘクタールの土地をもつ村内有数の大土地所有者で、木工細工業を営み、米倉庫を所有する地主であった。さらに、[1・1・16]（男性、76歳、被害者）は、現在1600平方メートルの農地を所有し、牛の飼育もしている。一方、[1・4・10]（男性、85歳、被害者）は、農業労働者ではあるが、当時自警団団長であり、[1・2・13]（男性、当時39歳、被害者）は、村役人Eの実弟にあたり、さらに[2・2・45]（男性、当時38歳、被害者）は、人民青年団、BTIに属し、いずれも村内で有力者とみなされていた。「狙われたのは有力者」⁽²⁹⁾、「被害者の多くはBTI幹部、みな金持ちだった」⁽³⁰⁾と言われる由縁である。

また、被害者は相対的に加害者よりも年齢が高く、自警団に所属していたという特徴があった。しかしその一方で、逮捕・殺害のされ方には多様性がみられた。新興勢力の指導格の男性は政治犯としてブル島に流刑になった。[1・1・2]（男性、当時35歳、被害者）は、観光局職員をしていた[2・2・5]（男性、当時39歳、被害者）とともに、夕方4時に拉致され行方不明となり、家族のもとには何者かにより赤く血の染まった服だけが返された[1・4・5]（女性、59歳）。

バトゥから西方に45キロメートルほど離れた平野部に位置するクディリ出身で、1954年に結婚を機に村に移住してきた[1・4・10]（男性、85歳、被害者）は、実はPNIの青年団のプムダ・マルハエンのメンバーであり、PNIの熱心な支持者であったにもかかわらず、同区のバンセル6人

によって村役場に連行されたが、運よく釈放された。[1・2・13]（男性、当時39歳、被害者）は、BTIの行列に並んでいたところ、家の壁にハンマーと鎌の印を描かれ、逮捕されたが、運よく釈放されるも、帰路甥[1・2・12]（男性、加害者）により殺害された。

一方、軍、警察とともに「死刑執行人」として殺害に積極的に手を染めた加害者は、被害者に比べて一様に若く、村役人Eの息子である[1・2・12]（男性、加害者）が叔父[1・2・13]（男性、当時39歳、被害者）を殺害した親族間殺人事件と、虐殺後に村役人になった[2・2・33]（男性、83歳、加害者）を除き、土地なし6世帯、500ヘクタール以下1世帯、1000ヘクタール以下2世帯と、大土地所有者はおらず、2人を除く加害者10人がバンセルに属していた。

一般的に虐殺以前からNUがPKIを警戒していたことは先行研究も指摘するところである。1950年代後半に土地改革をめぐり、PKIが「農村の悪魔」とキヤイ⁽³¹⁾を嘲笑し、PKI系の人民文化協会（略称LEKRA）がジャワ民衆演劇を侮辱し、BTIと人民青年団がイスラム宗教儀式を妨害する事件が発生していた。そのためNUはPKIを警戒し、PKIとその関連組織の活動禁止を要求する声明をスカルノに提出していた⁽³²⁾。

その上で、ブンガ村での加害行為には多様性がみられた。[2・2・33]（男性、83歳、加害者）は、警戒活動にはあたっていたが、殺害には手を染めていない。W（男性、加害者）はかつて[1・4・15]近郊の家で弟のX（男性、加害者）とともに暮らしていたが、兄弟そろってバンセルの隊長と副隊長として殺害を主導した。Wは1965年にアンソルの指導者が交通事故死したため、このとき指導者になったばかりであった。[2・2・38]（男性、73歳、加害者）と[2・2・40]（男性、70代、加害者）もやはり兄弟でバンセルに参加し、「死刑執行人」として積極的に殺害に手を

(29) [1・3・7]（男性、55歳、傍観者）へのインタビュー、2010年7月22日、自宅。

(30) [1・4・5]（女性、59歳、傍観者）へのインタビュー、2010年9月24日、自宅。

(31) 中・東ジャワにおけるNUの地方指導者の呼称。

(32) McGregor, Katharine, E, *Confronting the past in contemporary Indonesia: The Anticommunist killings of 1965-1966 and the Nahdlatul Ulama*. *Critical Asian Studies* 42(2), 2009, pp.195-224.

染めた。

村人が「死刑執行人」として殺害に手を染めるまでには、虐殺の決定、組織のネットワーク、作戦に応じてつぎのような組織的かつ重層的な加害の構造があったことが、先行研究によって明らかにされている。

それによれば、第一の層は、地方の軍部である。彼らは虐殺のはじめから巡察隊の特定の上層部の者となつたり、一定の関わりをもっていた。とはいえ、目立たぬように、巡察隊と直接関わることは極めて稀で、その際も軍人であることを隠した。その結果、当の加害者たちでさえ、軍部の作戦に気づくことは困難であった⁽³³⁾。

第二の層は、現場の作戦を指揮した人々である。なかでも目立ったのが、青年組織の指導者であった。たとえばアンソルには、比較的教育程度が低く、下層階級の者が参加し、「まず破壊ありき。つぎに問題の解決」あるいは「勝てば官軍、負ければ賊軍」を座右の銘としていた。このように暴力を肯定し、メンバーのなかには巡察隊に加わり、「死刑執行人」となる者さえいたアンソルは、当時インドネシア・イスラム学生協会（略称PMII）、ナフダトゥル・ウラマ学生連合（略称IPNU）などのイスラム学生組織と敵対関係にあった⁽³⁴⁾。

第三の層は、虐殺を実行した「子供たち」である。この層には様々な理由で巡察隊に加わった下級兵士も含まれる⁽³⁵⁾。

このような三層構造のなかで「死刑執行人」と「子供たち」は虐殺を実行していたわけであるが、実際の殺害行為は巡察隊あるいは個人によって、慎重に計算されて行われたものであり、とくに個々人のレベルでみると、死刑執行人は行動を起こしている時には確信を持ち、自覚的でしたらあったとされる。

死刑執行人の多くは、虐殺をはじめる前に身体が不死身になるようにグンペレンガンやチジ

ブの儀式を行った。たとえばアラビア語の聖句が書かれた生卵を飲み、「ヤ、アッラー、ヤ、ラティフ、ヤ、ラティフ」と繰り返し声高に唱えることで、精神を高めた。そして、同年輩による「圧力」と「知りたい」という好奇心から殺害を実行した。通常、殺害後に彼らは茫然とし、吐き気を催し、気を失いかける。そのような状態から「解放」されるために、他のメンバーが犠牲者の血を舐めるように命じることもあったという。しかし、実際に犠牲者の血を舐めた者は、悪魔にとり憑かれたような感情に陥り、つぎつぎに犠牲者を殺していこうとした。死刑執行人たちは、恐怖を撒き散らすために、あるいは勇気の印として持っていくために、犠牲者の性器や耳、指を切り落とした⁽³⁶⁾。

また、死刑執行人のあいだでは、火器の使用は実力や敵を殺す技に劣ることを示し、臆病者のすることであると考えられていた。彼らは銃弾に対して不死身であると信じる一方で、武器をもつことは、指導者であることの証しとなった。そのため、火器は、殺しの道具というよりも、国から与えられた権威と公の権力の象徴となっていた。このように一対一の対決が、彼らの殺人の基本であり、鎌や刀、クリス、鉄パイプなどの武器が好んで用いられた。彼らは経験を通して、最も弱くかつ最も傷跡が残りにくいところは首筋の上部で、剣や鎌を使った場合の急所は首の前面であることを知っていた⁽³⁷⁾。

さらに加害行為はときに性暴力の形をとっていたことが先行研究によって明らかにされている。たとえば、東ジャワでは、マラン県シンゴサリ郡デンコル村で、女性村長が殺害される前に服を脱がされ、性器に火を押し付けられた。またブリタル県ングレック郡ではゲルワニ地方支部の女性幹部がアンソルのメンバーにレイプされた挙句、胸から性器にかけて体を裂かれた。同県ガルム郡でも妊娠したゲルワニのメンバーがお腹を裂かれて殺されている。さらにバ

(33) Hermawan Sulisty, op.cit.; pp201, 202.

(34) Hermawan Sulisty, op.cit.; pp202, 203.

(35) Hermawan Sulisty, op.cit.; pp201, 202.

(36) Hermawan Sulisty, op.cit.; pp204, 205, 211.

(37) Hermawan Sulisty, op.cit.; pp178, 179.

ニュワンギ県では、女性は膣から腹部にいたるまでナイフで刺殺され、人民青年団の男性は切り取られたペニスを警備所に吊られた⁽³⁸⁾。

このようにみえてみると、たしかに人々を狂気に駆り立てるきっかけをつくったのは国家権力であったといえるが、それをエスカレートさせ、猟奇的な方法で殺害を実行していたのは、村人自身であったという虐殺の構図が浮かび上がってくる。

1966年から1967年にかけて、各地における虐殺の鎮圧は各地方の軍司令官に委ねられており、東ジャワでは1966年6月にスミトロが東ジャワ軍管区司令官に着任し、虐殺の収拾に乗り出した。実はスミトロは1965年12月に、東ジャワの各部隊を訪問し、スハルトのPKI壊滅命令を現場に指示した張本人であったが、虐殺がエスカレートするのをみて止めに入ったのである。

その一方で、同時期に東ジャワでは南ブリタにPKI党員が集結し、地元住民の支援を得てゲリラ闘争を目論んだ。しかし国軍は1968年にトリスラ作戦を実行し、これを鎮圧した⁽³⁹⁾。

4. 虐殺以後の村落社会における 権力関係の形成と変化

虐殺後の1967年、J村長は加害者側のイスラム青年たちの吊し上げにあい、辞任に追い込まれた。村長選挙の結果、国軍の軍曹であったfが新村長に選出される。

fは虐殺の一件とは無関係であったが、以下で明らかにしていくように、虐殺の体験や記憶を軸に構築された、被害者家族を最下層に置く村内の人間関係の序列を利用して、被害者家族(18世帯、60人)を徹底的に差別、排除し、大勢の村人に恐れられた。

(1) 被害者家族

まず、1970年代を通じて、被害者とその家族は政治的かつ社会的に差別され、排除された。

そもそも、元政治犯には言論の自由がなかった。治安秩序回復作戦司令部(略称KOPKAMTIB、治安対策のために設立された統合司令部)は1966年から1972年の間に50万人以上にのぼる政治犯容疑者をジャワの刑務所に拘留した。彼らは多くの場合、ろくな取り調べも受けられずに獄につながれ、放置された。司令部は11万6000人におよぶ政治犯をA級、B級、C級の三つに格付けした。A級政治犯はクーデター未遂事件に直接関与したPKIの指導者やこれに同調したスカルノ政権の高官たちで、PKI幹部のニョトとスティスマンは、死刑判決を受けて処刑され、ラティフ大佐は終身禁固刑を言い渡された。1971年の時点でA級政治犯は約5000人にのぼったが、5年後には1800人にまで減じられ、一方で残された人々の多くはB級政治犯へと再格付けされた。B級政治犯とは、クーデターを支持したとみられるが、はっきりした証拠がないために起訴できなかった拘留者のことである。司令部は1976年にその数を約2万9500人と発表した。1969年以来、1万2000人のB級政治犯がブル島に流刑され、孤島での過酷な生活を強いられた。その一方で、インドネシア政府は1976年をはじめまでに共産主義の同調者として逮捕されたC級政治犯約55万人を全員釈放した。さらにその後、国際社会からの批判を受けると、1979年末までにB級政治犯も全員釈放している⁽⁴⁰⁾。

しかし釈放後も元政治犯は1970年代中頃に成立した「環境浄化」諸法や内務大臣指令(1981年第32号)により当局の監視を受け続け、政治犯や元政治犯の兄弟、配偶者、子供を政府関係の仕事に雇用・応募することは禁止され、選挙権などの市民的権利を剥奪された。さらに身分証明書にET⁽⁴¹⁾という特殊なコードを書きこまれ、就職、進学などに際し差別を受けた。

(38) Cribb, Robert ed, op. cit.; pp171, 172, 175.

(39) アンドレ・リム「南ブリタルにおけるPKIの武力闘争とトリスラ作戦」ジョン・ローサ他編、前掲書、335-404頁

(40) ヘミッシュ・マクドナルド著、増子義孝・北村正之訳 1982『スハルトのインドネシア』サイマル出版会、1982年、225-241頁。永井重信『栄光の独立と国難への挑戦』樹と匠社、2011年、427頁。

(41) Eksの略称で政治的受難者(Tahanan Politik)のこと。

様々な差別や嫌がらせを受けたのは、残された被害者家族もまた同じだった。その際、国家権力によるPKIに対する指導が村役人に対してなされていた。

軍からは「村役人の中にPKIがいたら即職務停止。村のPKIは上に報告し、移動させよ」、警察からは「警察官のPKI子孫との結婚禁止、PKIと関係のあった家族はすべて罰印を付す」、郡長からは「元PKIとその子孫が戻ってきたので、再び警戒し記録をとること」との訓示があった⁽⁴²⁾。また、パトゥの教育文化部での村役人の会合でも「PKI、その印がある者への国民登録証（KTP）は選別せよ」との指示があった⁽⁴³⁾。さらに、パトゥでのマラン県官吏と村長の会合でも「潜在的なPKIの危険に用心せよ」と呼びかけられていた⁽⁴⁴⁾。

このような「上から」の指導に対して、村役人たちはつぎのように呼応していた。

村長と区長の会合では「PKIの発展を警戒せよ。村人がPKIに取り込まれていないか調べよ。長期間にわたり生活の保護を受けていた両親、子供、養父母、祖父母、孫、兄弟、親戚には不潔（tidak bersih）との書類を与える」ことが申し合わされた⁽⁴⁵⁾。また、政府関係者、村長、書記の会合では「PKI党員のデータを再度とる。PKIの増加に警戒せよ。PKIの移動を把握せよ」⁽⁴⁶⁾、村落議会⁽⁴⁷⁾では「PKI関係者はKTPにマークがある」⁽⁴⁸⁾ことが確認されていた。さらに、マラン県での土地と税金についての会合の席でも「PKI関係者に対してはブラックリスト⁽⁴⁹⁾を用意しなくてはならない」と申し合わ

されている⁽⁵⁰⁾。

つまり、村役人たちはPKIを書類上分類し、監視していたということになる。そしてその際、関係者の中に一人でも元PKI党員がいれば、一族郎党が「不潔」に分類され、差別された。そして、そのブラックリストは更新され、再生産されることで、村人の誰しもがそこに落ちる恐怖を感じていたのである。では実際に「不潔」に分類されるとどのような不利益を被ったのであろうか。

公職選挙準備のための村落議会では「PKI関係者は名簿から除外」⁽⁵¹⁾されるとされ、パトゥ郡での会合では「ハジ（メッカ巡礼）に行く者は村長が署名した、自らが清潔であることを示す書類を準備すること」⁽⁵²⁾と指導されていた。

これらのことは、村人のつぎのような証言とも一致する。

「虐殺の後、PKI党員に対する差別はたくさんあった。まず、PKI党員の子孫はみな村役人になれなかった。軍人や警察と結婚しようとしてできなかった人もいる。やはりPKI党員の子供で看護学校を終えていよいよ看護師になろうというときに、すぐに退学するようにと書かれた手紙を受け取った人もいる。村側はPKI党員にはとても厳しく、はっきりとした差別があった。f 村長はPKI党員に関する完璧なデータを持っていて、いつも彼らを遠ざけていた。村長選挙があった時は、PKI党員として登録されていた人は選挙権がなかった。彼らはみな墓地の近くに集められて監視され、投票に参加させて

(42) 村長手記 1985 年 8 月 6 日。

(43) 村長手記 1985 年 11 月 6 日。

(44) 村長手記 1990 年 1 月 8・9 日。

(45) 村長手記 1986 年 9 月 3 日。

(46) 村長手記 1986 年 9 月 3 日。

(47) ここでいう村落議会とは、村内に選出された構成員により意思決定される代議制度に基づく会合と意思決定制度のことである。

(48) 村長手記 1987 年 2 月 17 日。

(49) f 村長はそれを「D 類」と呼んだが、おそらく PKI 政治犯が A 級、B 級、C 級の三つに格付けされていたことからそう呼んだのではないかと想像される。

(50) 村長手記 1987 年 2 月 17 日。

(51) 村長手記 1986 年 4 月 14 日。

(52) 村長手記 1988 年 2 月 8 日。

もらえなかった。f 村長の時代はPKI党员にと
って一番苦しい、難しい時代だった」⁽⁵³⁾

「差別を受け看護師になれなかった」⁽⁵⁴⁾

「当時はとにかくみなゴルカル⁽⁵⁵⁾を選ばなければならぬことになっていた。もちろんゴルカルではない人もいたが、ごくわずか。以前、村落行政について重要な会合があるということで、村人全員が広場に集められたことがあった。すると外部の人が出てきて国家の治安を守るため、強盗や殺人がないように村人はみなゴルカルに入らなければならないと説諭された。それ以来みなゴルカルを選んでいく。そうしないと虐殺のときのように犠牲者が出るのを恐れて」⁽⁵⁶⁾

「当時PKIの子供はとてもかわいそうで、周囲からPKIの子供と友達になるなどいわれていたので、同じPKIの子供同士か、PKIであることを気にしない人としか交われなかった。[1・1・2] (50歳、男性、被害者家族) が子供のとき、近所の人ですらモノを売りがらなかった。PKI関係者は軍人、警察官、公務員になれず、また軍人、警察官、公務員と結婚できなかった。昔PKIの娘がコパスス（特殊部隊）の男性と結婚したが、結婚式の時に新郎が客人の前に引っ張り出されて結婚式がご破算になった」⁽⁵⁷⁾

このように、被害者家族は「不潔」と分類されることで、村落社会の最下層に位置づけられ、上昇する機会を事前に摘み取られていた。

その頃村内で組織された様々な社会組織に参

加することを憚られていたことが、それを物語っている。

具体的には、ブラックリストに登録されている時点で村政にはまったく関与できず、共同礼拝 (tahillan) にもアンソルやファタヤットから「PKIは無神論者」と敵視されて参加できなかった。そればかりか周囲の差別や偏見から農民グループ (Gabungan Kelompok Tani) にも参加できず、例外的に参加できた若者グループ (Sinoman) や母子健康グループ (略称 Posyandu) 内でも重要な地位につくことはなかった。

(2) 加害者家族

つぎに、加害者とその家族の一部は1970年代から村政などにおいて一定の役割を果たした。

たとえば[2・2・33] (男性、83歳、加害者) は、1967年から1972年にナフダトゥル・ウラマ党幹部、1977年に開発統一党 (略称PPP) 幹部⁽⁵⁸⁾を経て、1982年にゴルカルに入党し、村のコミサリス (代表委員) となり、f 村長の片腕となって補佐した。

また [1・2・2] (男性、68歳、加害者) は村の治安維持の任にあたった。

さらに [2・2・33] (男性、83歳、加害者) とS (ラベンダー区、男性、73歳、加害者) の妻は、母子健康グループ (略称Posyandu) の幹部になった。

しかしその一方で、加害者家族 (15世帯、64人) のうち、イスラム活動に熱心な者はf 村長と対立し、抑圧された。というのも、熱心なジャワ主義者であったf は、村長就任後に礼拝をするようになったが、それをみたアンソルの指導者が礼拝の仕方がおかしいとののしり、一悶

(53) [1・2・16] (男性、75歳、被害者) (女性、64歳、被害者家族) へのインタビュー、2011年1月25日、自宅。なお、選挙権についてスハルト体制崩壊後に回復している。

(54) [1・1・5] (女性、44歳) へのインタビュー、2011年2月19日、自宅。

(55) Golongan-Karya の略称で、職能集団を意味する。

(56) [1・2・18] (男性、45歳、被害者家族) へのインタビュー、2011年1月21日、自宅。

(57) [1・4・5] (女性、59歳、傍観者) へのインタビュー、2010年11月19日、自宅。

(58) NU は1985年以降政党政治から撤退していたため、スハルト時代にNU票の多くは開発統一党に流れていたとみられる。その後、1999年の総選挙の際、中・東ジャワのNU票はアブドゥル・ラフマン・ワヒドの提唱で結成された民族覚醒党に、それ以外の地域のNU票は開発統一党に分散した。

着あって以来、イスラム有力者を敵視していたからだ。

ところで、当時傍目にみても、被害者家族と加害者家族が交流することはまったくなく、互いに話しかけることすらなかった。

「一ブロック⁽⁵⁹⁾間の隣人とは一緒に農業労働をし、モノやカネを融通し合っていた。しかし被害者家族と加害者家族が交わることは一度もなく、話しかけることすらなかった」⁽⁶⁰⁾

しかしそのような両者の関係性は、多かれ少なかれ虐殺とは直接の関係をもたなかった非当事者である傍観者の村人たちも同様であった。1970年代を通じて、被害者家族と親しくすると、自分も「PKI」と同一視されるという差別や偏見が存在し、被害者を「よくない家族」とみなしてモノを売らず、「PKIの子供」と遊ぶのを禁止する親が続出した。

(3) 権力関係の形成

このような1970年代における被害者家族と加害者家族の関係性が示唆するのは、農村という閉鎖的な空間のなかで、虐殺を契機につぎのような人間関係の序列が形成されていたということである。

まず序列の最下層に位置づけられたのが被害者家族である。彼らは権力によって村政からはじかれるという「上から」の差別を受けただけでなく、隣近所の村人からも「よくない家族」とみなされて、実質的に村内の社会組織に参加する権利をも与えられないという「横から」の偏見によって日常生活を制約され、スケープゴート（排除の対象）となっていた。

これに対して、最下層のグループを形成していたのが、f 村長を筆頭とする村役人たちであった。

そして、下層と上層のあいだに形成された中間層には、村長とライバル関係にあった l とその取り巻きの m（男性）、n（男性）、[1・1・27]（男

性、66歳）や、官製組織や日常の近隣づきあいのなかで個々の人間関係により生まれた様々なグループがあった。

ここで重要なことは、上のような人間関係の序列がつくり出した権力関係のなかで、村人の大多数は暴力をみてはやし立てる「観衆」になることもなければ、それを批判し、防ぐ「仲裁者」になることもなく、ただ見て見ぬふりをする「傍観者」にとどまっていたということである。

その結果、虐殺を契機に生まれた人間関係の序列は維持されるばかりか、村内で様々な行事を催し、意思決定を行う際に、上層グループが下層グループに干渉することで、その力関係はますます強化されていった。

その一例として、虐殺を契機に村人総出で行うことになった村夜警の様子を、村人の語りをもとにみてみよう。

「極悪非道だったのは元軍人の f だ。もしも夜警にこなければ殴られた。だから f が村長をやめたときはみなとても喜んだ。f が死んだ時、みなむしろ喜び、祝事があったほど。葬儀には誰も参加しなかった。わしも夜警に行くのが遅れて殴られた。わしの方が年上なのに。当時の夜警は、哨所（Pos）が f の家の近くにあったので、f の家を警護しているようなものだった。夜警にこられないときは、他の者が呼ばれて行かなくてはならなかったが、着くなり殴られていた」⁽⁶¹⁾

このような光景を目の当たりにした村人たちは、f 村長とその取り巻きに対して恐怖心を抱いた。

「夜警には一週間に10～12人が呼び出された。もっぱら今の第一小学校の通りにある村長宅近くの哨所でだけ夜警がなされた。夜の9時が集合時間で、もし遅れたり、こない者がいたら、呼び出されて殴られていた」⁽⁶²⁾

(59) 隣家同士が連なっている空間のことを意味する。

(60) [1・4・5]（女性、59歳、傍観者）へのインタビュー、2010年11月19日、自宅。

(61) [2・1・38]（男性、73歳、加害者）へのインタビュー、2011年1月26日、自宅。

「当時の村落行政は軍隊のようなシステム。f 村長は残酷で、気性が激しい人。夜警があれば、マグリップには出発しないと、もし遅れでもしたら怒られてしまう。夜警は毎週土曜、日曜に一度あり、深夜12時頃に f 村長の家の前を警戒し、その後一時頃に村内を巡回していた」⁽⁶²⁾

「f はとても醜い人。たとえ小さな問題でも目をつぶらず、必ずといっていいほど非難された。もしも夜警に遅れようものなら、殴られた。とにかく f の村落行政は軍政そのもの。f はとても偉ぶっていたので死んだときに葬儀に参列する人はいなかった」⁽⁶³⁾

「f とは一度も親しくしたことがない。f が死んだときは誰も家に弔問に行かなかった。だって f は村人に対してとても残酷だったから。もしも夜警にくるのが遅れたら怒られ、木で叩かれた。f の補佐をしていた p は昔村内の宗教家だったが、とても悪い人で、いつも人々を殴っていた」⁽⁶⁴⁾

(4) 忘却の政治

このような最上層グループによる直接的な暴力を目の当たりにして村人たちがまったくといっていいほど抵抗しなかった理由としては、当時はまだ住民虐殺の記憶が巧みに繰り返し利用されていたことと、リング栽培の採算がよく、村の経済状況が好調であったことが考えられる。

前者については、国家権力によるメディアを用いたつぎのような情報操作があった。

1984年から毎年9月30日に情報省所管の国营テレビ放送（略称TVRI）⁽⁶⁶⁾で放映されるようになったプロパガンダ・フィルム「9月30日運動の裏切り」は、視聴者に大量虐殺にかかわる想像上の恐怖を再生産することに一役買った⁽⁶⁷⁾。スグロホ・ノトスサントが脚本を手がけた、上映4時間におよぶ同映画は、1984年に69万人におよぶ観客動員数第1位を記録し、インドネシア映画フェスティバルで最高シナリオ賞を獲得。同年から1997年の間、毎年学校でも上映会を行うことが義務づけられ、PKIの「裏切り」と国軍の「救世主」としての役割が宣伝された。

国家権力はメディアを巧みに用いることで虐殺の記憶までも操作していたのである。これは中央で起きた「大きな物語」を流布させ、その一方で地方の大量殺戮の忘却を作り出そうという忘却の政治であり、社会的暴力の記憶を抹殺しようとする記憶の暴力に他ならない⁽⁶⁸⁾。

このように政府による上意下達の情報伝達や情報操作により、村人たちは国家による暴力と監視を受け入れていった。その結果、国家権力による不条理な暴力を見聞きしても、それを肯定するようになった。

たとえば、1983年に起きたペトルス（Petrus）と呼ばれる「謎の連続射殺事件」では、ジャカルタおよびジャワ3州で、政府発表では300人以上、海外では3000人から4000人にのぼるとされる、1970年代に政府の政治工作に使われたプレマン（preman、やくざ、ならず者）が、次々と虐殺され、夜が明けると道端に死体が放置された⁽⁶⁹⁾。

このペトルスについて、村人はつぎのように

(62) [1・2・26]（男性、64歳、傍観者）へのインタビュー、2011年1月25日、自宅。

(63) [1・2・13]（男性、69歳、傍観者）へのインタビュー、2011年1月21日、自宅。

(64) [2・1・31]（男性、傍観者）へのインタビュー、2011年2月20日、自宅。

(65) [1・3・16]（女性、傍観者）へのインタビュー、2011年1月22日、自宅。

(66) 1962年に放送開始以降、1989年3月に民間放送が開始されるまでテレビ放送を独占していた。

(67) McGregor, Katharine, E. (2008) *Ketika Sejarah Berseragam: Membongkar Ideologi Militer dalam Menyusun Sejarah Indonesia*. Yogyakarta: Penerbit Syarikat, 2008, pp173-179.

(68) Herlambang, Wijaya, *Cultural Violence: Its Practice and Challenge in Indonesia*. Saarbrücken: VDM Verlag Dr. Müller GmnH & Co. KG, 2011.

(69) この他にも、1975年以降に18万人の人々が死んだ東ティモール「統合」、数百人が犠牲になった1989年のランブン事件、1991年のディリ事件と、国家の暴力は、ことあるごとに国家テロとして誇示された。

肯定的に語っている。

「過ちを犯した者はブラックリストのようなものに記録され、逮捕され、殺された。遺体は袋のなかに入れられて、公共の場に捨てられた。しかし、バトゥでは一度も事件は起きなかった。でもその結果、犯罪が減り、やくざたちは恐怖におびえていた」⁽⁷⁰⁾

「ペトルスによって犯罪率が下がり、状況は大きく変化した。悪人は恐怖心を抱き、そのため村内はとても安全になり、不良青年もまたペトルスの恐怖で少なくなった。このとき村では殺人事件は起きなかった。というのも、村のおじいちゃん⁽⁷¹⁾ がスミトロ將軍のような国軍の仲間を紹介してくれたので、村は平穏で、外の人間も村に入ってくるができなかったから」⁽⁷²⁾

(5) 権力関係の変化

このように虐殺以後にブンガ村で生まれた人間関係の序列にもとづく権力関係は、1970年代を通じて忘却の政治と村の好調な経済状況を要因として維持ないし強化されていったように映じる。

しかしその内実を詳細に検討してみると、「PKIの脅威」は選挙でゴルカルが勝利するための方便となり、「ゴルカルに投票しないと逮捕される」との噂も、単なるプロパガンダでしかないことに、村人たちは内心では薄々気づいていた。利権をめぐる反ゴルカル派の村人がf 村長と主導権争いを演じるなか、たしかに被害者家族は政治的には依然として差別を受け続けていたが、村人のあいだでの差別や偏見はむしろ緩和されていったことが、つぎのような村内の社会組織への参加状況からわかる。

1980年代に入ると、前出の若者グループ、母子健康グループのほかにも、村内には、村落評議会（略称LMD）、村落開発委員会（略

称LPMD）、ルンブン協同組合（Lumbung Paceklik）、農民グループ、婦人会（略称PKK）、若婦人会（PKK Remaja）、隣組（略称RT）、青年団（Karang Taruna）、視聴読者グループ（略称Kelompokcapir）、コーラン朗誦会（Yasinan）、金曜レゲ会（Jumat lege）、イスラム寺院青年会（Remas）といった様々な官製組織が生まれ、活発に活動するようになった。

興味深いことに、被害者家族は1980年代を通じて村長選挙に参加する権利を認められず、村役場での書類作成についても村役人から嫌がらせを受けるなどの困難がともなっていた一方で、共同礼拝や農民グループについては「1・1・1」（男性、50歳、被害者家族）のように参加する者が出はじめたということである。つまり、権力あるいは最上層グループによる差別は継続したが、それ以外の層からの差別や偏見はむしろ緩和されるようになり、実際、この頃から村人の多くが被害者家族と近所付き合いをすることを怖がらなくなっていた。

そのような村内における状況を鑑みるならば、国家権力が選挙、映画、博物館などを通じて「PKIの脅威」を流布したのは、上のような権力関係の変化に対抗していくためには、むしろ必要な措置であったと解釈することもできよう。

そう考えるならば、ブンガ村では虐殺から15年が経過して以降、次第に被害者家族、加害者家族、傍観者のあいだの関係性に変化が生じ、村人たちは権力との縦の関係においては従来の人間関係の序列を維持しつつ、社会との横の関係においては、新たな権力関係を模索するという「二重の生活」を送っていたということになる。

おわりに

本論文では、9・30事件の過程で虐殺が生じ

(70) 「1・1・2」（男性、50歳、被害者家族）へのインタビュー、2011年1月5日、自宅。

(71) 「1・3・11」（男性、91歳）のこと。

(72) 「1・1・27」（男性、66歳、傍観者）へのインタビュー、2011年1月4日、自宅。

た村落社会のその後を描くことで、虐殺以後の村落社会における権力関係の形成と変化をみてきた。

虐殺後の村長選挙で村政が一新されたブンガ村では、虐殺の被害者家族を最下層、村役人たちを最上層とする新たな人間関係の序列にもとづく権力関係が生まれた。そしてそれは一見すると1970年代を通じて国家権力が主導した「9・30事件はPKIによる陰謀」とする忘却の政治と村の好調な経済状況を要因として維持ないし強化されていったかのようにみえた。しかしその内実を詳細に検討してみると、1980年代を境に被害者家族のなかには、1970年代には参加することを事実上許されていなかった共同礼拝や農民グループに参加する者が現れるようになった。その間も被害者家族に対する権力あるいは最上層グループによる差別は継続したが、それ以外の層からの差別や偏見は緩和されるようになり、実際、この頃から村人の多くが被害者家族と近所付き合いをすることを怖がらなくなっていたのである。

その結果、時がたつにつれて被害者家族、加害者家族、傍観者のあいだの関係性に変化が生じ、村人たちは権力との縦の関係においては従来の人間関係の序列を維持しつつ、社会との横の関係においては、新たな権力関係を模索するという「二重の生活」を送っていたことを、本論文ではブンガ村の事例を検討することで指摘した。

たしかに虐殺という、人々を狂気に駆り立てるきっかけをつくり出したのは権力であるが、それをエスカレートさせて猟奇的な方法で殺害を実行していったのは村人たち自身であった。しかし、権力との縦の関係においては従来の立場をとりながらも、実際の横の関係においては被害者家族との新たな関係を模索したのも彼らである。

そのような村落社会のなかでのありのままの権力関係を重視し、安易に過去が清算されていないことを批判するのでも、それとは逆に公的和解の推進などの新たな権力の導入を性急に求めるのでもなく、半世紀近くにわたり虐殺以後の世界を生きてきた人々のありのままの姿を理

解することの必要性を確認し、本論文の結語としたい。

付記

本稿は日本学術振興会研究者海外派遣基金第2回優秀若手研究者海外派遣事業、科学研究補助金（特別研究員奨励費）の成果の一部である。